

11/13(土) 13:00~17:15 Zoom によるオンライン開催

参加者およびレポートの数は少なかったものの、充実した内容のものとなった。

*教育のつどい 2021 報告 (荒木美智雄)

Zoom によるオンライン開催。北海道より、「会えないときこそ日記でつながる」(辺見真弓・小)と、「改悪学習指導要領『現代の国語』自主的再編成の試み」(池田和彦・高)の、2本のレポートが報告された。今年にはコロナ禍で制約を強いられる中での教育活動(小)と、安易な実用性を振りかざし文学教育を切り捨てる、高校の改悪学習指導要領の実施に向けての強い危機感(中高)が大きな話題となった。

*高校の改悪学習指導要領実施に向けての「不穏な」状況……緊急報告 (池田和彦)

全国教研終了後、改悪学習指導要領実施に向けての文科省、地教委の「不穏な」動きが加速。11月の「伝達講習」では、各校に改悪学習指導要領実施に向けての準備をPDCAサイクルで進めるよう、その内容の細部に至るまで、強圧的な指導が行われた。また授業内容が学習指導要領通りに行われるかどうか、詳細な年間計画を出させチェックする。小学校の先生方から、これでは児童が小学校から高校までの12年間にわたり不毛な教育にさらされる、と落胆の声。いかに国語教育の本質を見失わないようにするか、現場の取り組みが重要である。

*レポートは以下の6本

(1)文学作品を読むということ ～「かさこじぞう」の実践を通して、学習指導要領にもの申す～

市来健 (乙部小学校)

小学校2年の特別支援学級の児童への授業記録。「読む力」をつけない現行学習指導要領に基づく、指導主事や教育局課長達の国語教育や文学教材についての「指導」に憤りを感じ、学習指導要領の歴史を振り返りながら、国語教師として、どのように授業に向き合うべきなのかを自分に問いかけながら、「文学の読解力とは何か」を模索した実践だという。市来氏は、昨今指導されている「読解力指導」とあえて対置する指導をすることで、本当の読解力(児童が身につけるべきよみの力)とは何かを、実践を通じ明確に示している。市来氏は「良いことをするといつか報われる」という教訓としてこの作品をとらえるのではなく、「じさまとばさまのラブストーリー」とみる。そして、「紙黒板」という昔ながらの手法で、児童にこの作品の根底に流れるほのぼのとしたあたたかさを感得させることに成功している。参加者も、ひとつひとつの言葉に向き合って、丁寧に作品を読むことの大切さを再確認できた。

(2)非公開レポート

異常ともいえるぎすぎすした人間関係を抱える職場の中で、文学作品の確かなよみを成立させた貴重な実践記録。「生徒の多様さを尊重すると言いながら、近年小中学校を縛り付けている『〇〇スタンダード』は、結局は単一のモノサシで生徒を評価する矛盾したシロモノ。教師の仕事はクリエイティブなものであるはず」という意見が出されたが、全員が一致して共感。教師がクリエイティブな仕事をできることをスタンダードとできるような、現状を逆にとるようなしたたかな実践ができるよう、保護者や他の教職員を巻き込む運動(とはいえ、多大な困難を伴うが)の重要性が確認された。

(3)「若山牧水」論の新たな模索 —「世界中で一番淋しい父」牧水の謎— 荒木美智雄

国語教育全般にわたって、多彩な論考を精力的に執筆し続ける荒木氏が、「白鳥はかなしからずや……」

や「幾山河越えさりゆかば……」などの名歌で知られる若山牧水の「謎」に鋭く切り込む。レポートには6点の「謎」が示されているが、そのうち、牧水の歌意の底流にある「寂しさ」とは何か、国民から絶大な支持を得た牧水の歌が描写した現実はどんな世界か、の二点を中心に解説された。高校国語の授業の中で、近代短歌はとりわけ軽視されがちだが、文学教育が危機にある現在、文学の奥深さに迫り文学教育の可能性を広げる、貴重な報告であったと言える。

(4)「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動」の2021年度の活動について 戸川貴之（帯広北高校）

当日飛び込みのレポートながら、きわめて充実した内容。「アイヌ民族の自然観に大きく関わる、「カムイ」についての考え方が理解できる物語を読み、アイヌ民族の方から直接カムイについての考え方を学び、先住民族への畏敬の念を持ってアイヌ文学創作を行いたい」との目的意識のもと、YouTubeなどの動画などを見て学ばせ、学んだことをもとに「カムイについての物語」を創作させる。人物名、登場人物名などをアイヌ語で設定させるようにする。提出はGoogle Formを用い、Epub形式のオンラインブック形式での公開を考えるなど、ICTを駆使する。「アイヌ民族の思想を現代の社会において体現するようなものを創作できるよう」考えているとのことだが、生徒がこの後、氏の指導の下でどのような作品を完成させるか、期待したい。

(5)古典の授業について 東谷一彦（札幌国際大学短期大学部）

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科で、授業内で実施した「日本語表現アンケート」の結果、「高校までの国語の授業が無意味だったことや、やめてほしいことは何ですか。」の問いに、「古典」と答えた学生が半数以上いた。この事実から高校教員時代の古典の授業を振り返り、検討する。室蘭清水丘や札幌西での氏の実践に、小笠原洽嘉氏が指摘した助言を再現することで、古典授業のあるべき姿がくっきり浮かび上がってきたように思う。「古文では『ことば』の壁を破ることを最重点に考えられがちだ。実態から言っても、ある程度仕方がないところもある。しかし、そこに安住しては『授業の創造』は考えられない。『一教材一冒険』を提唱しておきたい。一つの教材で一か所だけ冒険をする。『知的冒険のすすめ』である「授業を途中で止める勇気と横道に引きずり込める発問をこそ、1時間に一つか二つ、用意すべきだ」という小笠原氏の指摘は、品詞分解表を再現するだけの古典授業を繰り返すのみの国語教師に対する、何よりの「薬」であろう。

(6)古典のよみにただしい日本語文法をいかす 一学校文法は古典をよむさまたげー

池田和彦（深川西高校）

現在の学校文法≒橋本「インチキ」文法は、言語の本質を無視したデタラメ文法。こんなものは、古典をよむ何の役にも立たないばかりか、害毒になるだけ。2006年からこの問題を自らへの課題として取り組んできた。昨年度は3年の「古典B」で、ただしい日本語古典文法の学び直しを実施した。しかしせっかく学んだ現代語文法とうまく関連させることができなかった。そこで本年度は1年の「国語総合」で、現代語文法と、それと同一事項の古典文法を交互に学習できるテキストを作成し、とりくんでみた。現在継続中の実践である。古典の語法に慣れさせる目的で、童謡「いぬのおまわりさん」を古典語訳するという奇抜な取り組みも、本集会直前に実施した。学校文法を駆逐するには、実践の輪を広げることが最重要だが、この点で日教組に大きく後れを取っており、協働が必要と痛感した。

（文責：池田和彦）